

2022年2月1日

新藤 通弘

チリ大統領選の結果とボリッチ新政権をどうみるか

昨年12月19日、チリで大統領選挙の決戦投票が行われ、中道左派政治連合、AD（尊厳承認）のガブリエル・ボリッチ候補が、極右の共和党のホセ・アントニオ・カスト候補に10ポイント以上の大差をつけて当選しました。なぜ、ボリッチ候補が当選したのか、ボリッチ氏は、どのような政策を進めるのか、見てみましょう。

▶ 両極化する政治勢力

今回の大統領選を考える場合、新たにチリの情勢が展開した2019年10月の地下鉄運賃の値上げに端を発した社会的騒擾事件を考える必要があります。騒動は、特定の政治勢力により組織されたものでなく、地下鉄運賃値上げに対する一般市民の自然発生的抗議行動でした。

事件に対処して、ピネエーラ右派政権は緊急事態宣言及び夜間外出禁止令を発令しましたが、治安が急激に悪化し、政府は、年金、医療、最低賃金などに関する一連の社会政策を発表したほか、8名の閣僚を更迭しました。しかし、この事件から右派勢力は、治安維持を強く訴えるようになり、一層右派的な政策を打ち出すようになり、左派勢力は、この抗議行動が、これまでの「中道右派」（ピネエーラ政権）、「中道左派」（バチエレ政権）の政権交代暴徒化した抗議の市民劇に対する拒否だと受け止め、これまでの中道左派政権ではなく、より左派的な政策を追求する政治連合を模索するようになりました。政治の両極化が強まったのです。

▶ 大統領予備選挙で左派勢力統一候補を選出

21年7月に実施された大統領予備選挙では、AD（尊厳承認）中道左派政治連合内部では、CD（尊厳あるチリ）左翼政治連合を代表してダニエル・ハドゥエ（チリ共産党）と、FA（拡大戦線）中道左派政治連合を代表して学生運動出身のガブリエル・ボリッチ（社会的統合 CS）が争いました。

ポリッチ氏は、キューバ、ベネズエラ、ニカラグアの人権問題を厳しく批判し、ハドウェ氏は、それは米国の干渉から起きたものであり、大手マスコミの報道に惑わされてはならないと反論。ポリッチ氏が指名を獲得しましたが、CD（尊厳あるチリ）政治連合は、カスト氏のあまりのひどい極右的発言を警戒し、カスト氏の大統領当選を阻止するため、キューバなどの人権問題を内政に持ち込まず、棚上げして反ファシズムの立場でポリッチ氏擁立に合意したのです。一方、右派のチリ共和党は、予備選挙を行いませんでした。

▶ **大統領選第一次投票、どの候補も過半数に達せず**

大統領選第一次投票は、AD（尊厳承認）中道左派政治連合のポリッチ氏、極右のチリ共和党のカスト氏他、2名の右派候補、3名の左派候補が参加しましたが、いずれも過半数には達せず、カスト、ポリッチ上位2名が決戦投票に進むことになりました。左派勢力 AD の合計得票率は 46.50%、右派勢力の合計得票率は、53.49%でした。

このため、ポリッチ候補は、支持を拡大するために、AD 中道左派政治連合以外の中道連合であるチリ社会党を中心とする NPS（新しい社会協定）や、キリスト教民主党を除くコンセルタシオン（民主主義に向けた諸政党の連合）の旧メンバーにも協力を依頼することとなりました。この政治連合構図が、ポリッチ政権の性格を大きく縛るものとなります。

▶ **国会議員選挙で左派は少数**

同時に行われた国会議員上下院選挙では、下院（定数 155 議席）は、AD 中道左派政治連合は 37 議席で少数派です。ポリッチ氏が協力を仰ぐ、別な政治連合である中道連合の NPS も 37 議席です。この二つの中道左派・中道勢力合計で 74 議席、過半数の 78 議席には達しません。

野党は、中道右派連合の CPM（よりできるチリ）が 53 議席、極右連合の FSC（キリスト教社会戦線）連合（共和党を含む）が 15 議席、中道右派連合 PG（ひとびとの党）6 議席で、合計 74 議席、その他 7 議席で、左右両派が拮抗しています。上院（定数 50 議席）では、与党中道左派・中道 25 議席、野党右派 25 議席と左右勢力が同数となる結果でした。

▶大統領選決選投票でボリッチ候補勝利

チリ大統領選決選投票は、極右政党のチリ共和党カスト候補と、中道左派政治連合 AprueboDignidad（中道左派の政治連合 FrenteAmplio と左翼政治連合 Chile Digno で構成）のボリッチ候補によって戦われました。決戦投票を迎え AD 連合は、中道連合の NPS の支持を得ました。

争点は、新自由主義を継続するか、社会格差の拡大や脆弱（ぜいじゃく）な年金制度、2019 年 10 月の反政府暴動以降、悪化した治安への対策、公的医療保険の 勝利を宣言するボリッチ氏創設、医療や福祉、教育の分野で国の責任、富裕層への課税強化か、減税か、移民流入問題、環太平洋経済連携協定（TPP）、ピノチェット独裁体制への評価などでした。

極右のカスト氏は、新自由主義の継続と減税、移民管理の厳格化、治安の強化、人工妊娠中絶や同性婚の合法化にも反対。ピノチェット軍事政権の支持を表明しました。

ボリッチ氏は、社会格差の解消、年金制度改革、医療福祉制度の改革、富裕層への課税、TPP への不参加、カスト氏のファシスト的主張を批判しました。また体制のいかに問わず人権抑圧を批判しました。

結果は、中道左派から中道派までの支持を得た中道左派のボリッチ候補が 55.87%確保し、カスト候補の得票率 44.13 に 10 ポイント以上の差をつけて勝利しました。

勝因は、カスト氏のファシヨ的な発言に少なからずの人がピノチェット時代を想起して、脅威をいただいたこと、経済が、2016 年以降 GDP の低成長が続き、2021 年はパンデミックもあり、マイナス 5.8%を記録する一方、インフレも 7.2%で、過去 14 年間で最高を記録し、格差の広がり合わせて、国民の間に新自由主義を進めてきた保守政権への不信が強まったことがありました。

なお、投票率は、大統領選第一次投票 47.33 %、決戦投票 55.65 %、国会議員選挙 46%で、低い投票率ですが、これは、民政移管後、保守派、中道派の政権交代の中で、政策が変化しなかったことから、国民の選挙への期待が低いことからくるものと思われる。

▶ 閣僚の指名 – 社会党と自らの党、社会統合党 (Convergencia Social)を重視

1月21日ポリッチ次期大統領は、予定閣僚リストを発表しました。24閣僚のうち、女性が14人、男性が10人、平均年齢49歳と、女性が58%を占めたこと、平均年齢が若いことが注目されました。また、毎週月曜日に開催される政治委員会には、大統領のほか、内務大臣（女性）、大統領府長官（男性）、政府官房長官（女性）、財務大臣（男性）、女性・ジェンダー平等大臣（女性）が選出されました。しかし、閣僚の顔ぶれをよく見ると様々な問題を抱えていることが分かります。

閣僚の、政治傾向では、最左派でポリッチ当選の原動力となったCD「尊厳あるチリ」左翼政治連合（上院議員14名）から4名、CDと一緒にポリッチを推薦するAD「尊厳承認」中道左派政治連合の一翼を担ったFA「拡大戦線」（上院議員23名）から8名、決選投票で協力を受けた中道連合のNPS「新しい社会協定」（上院議員37名）から4名、独立諸派から8名が入閣しました。最初からポリッチ氏を押し頂いたAD（CDとFA）には議席の持ち分通り、半数の12閣僚、決選投票で後から加わったNPSには、4閣僚ですが、NPSに親近性を持つ閣僚が数名おり、数字の上でバランスを取ったものとなっています。

▶ 財政・経済閣僚に新自由主義者、外相に人権派を登用

主要閣僚を個別に見てみますと、内相にはチリ史上初めて女性の無所属で、ポリッチの選挙参謀長を務めたイスキア・シチエスが任命されました。大統領府長官には、ポリッチの右腕といわれるFAの民主主義革命党で学生運動出身のヒオルヒオ・ジャクソンが任命されました。政府官房長官には、共産党員ですが、やはり学生運動出身で気心の知れているカミーラ・バジェホが選ばれました。女性・ジェンダー平等相にはCS（社会統合党）党員でポリッチ側近のアントニア・オレジャーナが新たに任命されました。財政相には、ピネエーラ政権下で任命された現中央銀行総裁で、元社会党員の新自由主義者、マリオ・マルセルを指名しました。マルセルは、年金問題で共産党、拡大戦線と鋭く対

立する立場を取っています。この 6 名が政治委員会を構成しますが、全体としては、中道左派路線の布陣となっています。

外相には、社会党に近い、人権問題専門家のアントニア・ウレホーラが、指名されました。ウレホーラは、元インスルサ OAS（米州機構）事務総長の補佐官、バチエレ政権の人権問題補佐官も務め、キューバ、ベネズエラ、ニカラグアで人権が侵害されていると批判するボリッチ次期大統領の外交政策を実行するものと思われます。防衛相には、アジェンデ大統領の孫である社会党のマヤ・フェルナンデスが就任します。経済・観光推進相には、ボリッチ側近の社会統合党員でチリ大学経済学部教授のニコラス・グラウが選ばれました。社会開発相には、ジャネット・ベガ カミーラ・バジエホが選出されましたが、これまで同省は政治委員会のメンバーでしたが、それから外されたので、ベガが、ボリッチ次期大統領に抗議する一幕もありました。

こうしてみると、閣僚の陣営からは、政権の性格は中道に近い、中道左派政権であることがうかがえます。経済政策では、市場重視の政策で、選挙で反新自由主義を述べてきたことがどれだけ実行できるか疑問に思われます。外交面では、キューバ、ベネズエラ、ニカラグア、あるいはボリビア、アルゼンチン、メキシコとは一定の距離を置いたものになるでしょう。

▶ **ボリッチ政権の行方、右にすり寄りか**

ボリッチ氏は、決戦投票で行政権の長である大統領職を獲得しました。しかし、決選投票で勝利を得たボリッチ政権の今後の見通しは、立法権の国会では、制憲議会でも、上院でも少数派であり、下院でも与野党が同数で勢力が拮抗しており、ポルトガル方式（少数左派与党が、別の左派ブロックの支援を得て政権を運営する）で、政権を維持しなければなりません。

さらに、政策を実行するためには法律を制定しなければならず、かなり右にすり寄り中道勢力、中道右派勢力の協力も必要とされます。ここに、一貫した左派的な政策を維持できるのか、政権基盤の脆弱性が見られます。

ボリッチ氏は、ポデーモスの指導者パブロ・イグレシアスに親近感を持っていると述べています。ボリッチ氏は、複雑な政治運営から、結局は左派的立場を失ったギリシャの急進左派連合シリザや、スペインのポデーモス党のように左派的立場を失って社会民主主義（資本主義の大枠を認め、新自由主義的傾斜を

強めている) に変質するのではないかという危惧も指摘されています (Pedro Jorge Velázquez, Granma, enero 25, 2022)。

ボリッチ氏のこれまでの言動と勢力基盤から、新自由主義により歪められた経済・社会の諸問題を抜本的な革新的な政策で解決することは、多難だと思われる。

▶ キューバ、ベネズエラ、ニカラグアとは冷めた関係か

外交面では、キューバ政府は、12月20日、ディアス=カネル大統領が、「今後とも両国政府と国民の協力関係を発展させたい」と抑制した形で祝電を送付しました。ベネズエラのマドゥーロ大統領、ニカラグアのオルテガ大統領も祝意のメッセージを送付しました。一方19日ベネズエラの反政府派指導者のファン・グアイドー氏も、「ベネズエラ大統領として」、ボリッチの当選を祝福しました。

しかし、ボリッチ氏は、昨年7月キューバ、ベネズエラ、ニカラグアでは人権が弾圧されていると非難しています (21.07.12 La Tercera)。また、今年になっても、ベネズエラのマドゥーロ政権を600万人が国外に脱出した失敗した体制と批判しています (22.01.21 BBC)。ボリッチ政権が、こうした立場を継続すれば、他のラテンアメリカの左派政権と緊密な協調行動をとるのは、難しいように思われます。

12月20日米国国務省のプライス報道官は、「チリ国民の模範的な大統領選挙とボリッチ氏の勝利を祝福し、両国は長期に渡り民主主義的価値観を共有している。ボリッチ政権とは人権と民主主義に関し積極的な協力を今後も継続したい」と祝意をのべました。

また、12月30日、ホワイトハウスは、バイデン大統領とボリッチ次期大統領が電話会談を行ったあと、声明で「バイデン大統領はチリの自由で公正な選挙を地域と世界における模範的なものとして祝福する。両指導者は、社会的正義、民主主義、人権、包括的な成長の推進の必要性を共有した」と発表しました。今後ボリッチ氏がどれだけ対米自立の姿勢を貫くかは未知数です。

最新の世論調査では、12月末の時点でボリッチ政権を支持するが54%、不支持が46%、1月末の時点で支持が51%、不支持が49%と拮抗しています

(22.01.30 El Mostrador)

